フィラデルフィアの馬場辰猪とキャムデンのホイットマン

田　村　晃　康

はしがき

私は岐阜大学在職中の1978年10月から1年間，文部省の在外研究員としてフィラデルフィアのペンシルヴァニア大学で研究生活を送る機会に恵まれた。フィラデルフィアはクエーカー教の指導者ウィリアム・ペンが建設した都市であり，現在もなおアメリカのクエーカー教の中心地である。私は研究テーマの関係で，同大学に滞在中，3人のクエーカーの教授に紹介されたが，その一人が，東南アジア研究を専門とする，歴史学部の Conroy 教授であった。

Conroy 教授は戦後数回にわたって来日し，東大で研究と教育に従事した経験があり，かつお嬢さんが日本人の学者と結婚していることもあって，大の日本びいきで，私もいろいろな機会にお世話になった。

初めて研究室に教授をお訪ねしたとき，私の専門がホイットマンであると聞くと，「ホイットマンは馬場辰猪と親交があったはずだが，知っていますか，Ethical Society を通じて知り合ったはずです」と言われた。私が「馬場辰猪について私が知っているのは，彼が自由民権運動の闘士の一人であったことくらいで，彼がホイットマンと親交があったというのは初耳です。もしそれが事実だとすれば，日本の研究家のあいだでもほとんど知られていないのではないでしょうか」と答えると，「それなら，ぜひ調べてごらんなさい」と言って，すぐその場で，Rittenhouse Square のそばにある Philadelphia Ethical Society 宛ての紹介状をタイプしてくれた。そして同時に，「馬場について知るにはこの本を読むとよいですよ」

と言って，書棚から一冊の本を取ってくれた。それは，見返しに著者萩原延寿氏の献呈の辞が書いてある『馬場辰猪』(中央公論社，昭和42年) の complimentary copy であった。この本は，中央公論社が新設した「吉野作造賞」を与えられたものである。萩原氏もかってペンシルヴァニア大学に留学し，Conroy 教授に学んだことがあったのである。

私は萩原氏の本によって，馬場が自由民権運動の挫折したあとアメリカに渡り，講演をしたり，新聞に投稿したりしていたが，1888年11月1日，肺結核のためペンシルヴァニア大学病院で死んだことを知った。1887年3月から死までの1年半あまりフィラデルフィアにいた馬場が，当時，河一つ隔てた隣りのキャムデン市に隠棲していたホイットマンと交友関係をもったとしても少しも不思議ではないが，この本には2人の出会いは全く触れられていない。それどころか，ホイットマンという名前も，当時ホイットマンと交渉のあった人たちの名前も出てこないのである。

私は，Conroy 教授が示唆したように，本当に2人が Ethical Society の会員として知り合うようになったのかどうか調べてみようと，早速Rittenhouse Square の同会を訪ねてみた。ところが，あいにくなことに，同会は Leader (会長)が前年死去し，目下その未亡人と娘が細々と活動を続けている状態であった。2人は記録文書類には関知しないらしく，「集会のある日曜日にいらっしゃれば，会の幹事や書記に紹介してあげます」と言う。次の日曜日に再訪したが，同会の archives は整理されておらず，結局，会の古い記録や会員名薄がどこにあるのか，いや，あるのかないのかさえ，知る者がいなかった。彼らのひとりは「多分，そのようなものは残っていないだろうが，ひょっとすると，本部である New York の American Ethical Union にそうした資料があるかもしれない」と言って，そこの Executive Director である Jean S. Kotkin 女史のアドレスを教えてくれた。私は女史に手紙を出して教示を乞うたが，彼女からの返事も，「ホイットマンと馬場辰猪が Philadelphia Ethical Society に所属していたかどうかは，私にもわからない」というものであった。

私の調査は，この時点でいったん行き詰ったが，その後 Philadelphia Ethical Society でもらった案内パンフレットと，帰国後手に入れた安

永梧郎著『馬場辰猪』(明治30年刊)や辰猪の日記などを突き合わせることによって，辰猪とホイットマンとの関係が Conroy 教授の言うような直接的なものではなく，Horace Traubel を介した間接的なものであったことにほぼ間違いない，という結論に達することができた。以下，私の入手しえた資料の許すかぎりにおいて，ホイットマンが馬場辰猪のことを知るに至った経緯を詳かにしてみたい。

1

馬場辰猪は土佐藩の出身であるが，その家系を辿れば，彼の先祖は甲州の武田信玄，勝頼の二代に仕えた，名将の誉れ高い馬場美濃守氏房である。氏房は，信玄の死後，幾度か勝頼を諫めて容れられず，長篠の戦いで討ち死したが，氏房の子氏勝は，武田家滅亡後土佐に落ち，香曽我部，長曽我部の二家に歴仕し，高く用いられた。しかし徳川の世となり，長曽我部が滅びると，馬場家も零落した。数代を経て，氏信の代に山内家に出仕することになり，以後，馬場家は武芸や学問に秀でた人物を幾人も出している。特に，祖父源馬は才能豊かな人であったらしく，35才で勘定奉行になったのを皮切りに，幾多の藩の要職を歴任して，馬場家の格式を上士階級にまで高めた。この祖父は，嘉永3年（1850）生まれの辰猪が14才になるまで生きて，彼に多大な影響を与えたようである。しかしこの祖父が死んだあと，父親と長兄が相次いで不名誉な事件を起こしたために，辰猪は若干16才にして馬場家の家督を引き継がなければならなくなった[1]。

辰猪はこの年（1866）藩校文武館に通い始めるが，翌年には早くも持ち前の勤勉さによって俊秀として頭角をあらわし，江戸遊学の機会を与えられて，慶応義塾に学んだ[2]。さらに1870年から'78年までに2回，合わせて7年間，イギリスに留学して法学を学んだ。ところが不思議なことに，新知識を身につけて帰朝した辰猪は明治政府に出仕しようとせず，終生在野の民権家として留まるのである。彼は自叙伝の中で「勇士としてその事績を日本の歴史に載せられた祖先の功勲の物語に激励されて，さういふ境遇の下にいるのでなかったならば，商業家とか科学者とかになったかも知れなかったその若者（辰猪自身のこと）は，抵抗し難く政治の領域へと導か

れて，自分の国の為めに，何事かをなしたいといふ志望を以って心を満たさるるに至ったのだ[3]」と書いている。西欧の政治の実情をつぶさに見てきた彼は，日本においても「人民がしだいに政治上の一要素をなしつつあって，政治家等は，その国を治めようとする場合には人民の向背をば考慮のなかへ入れざるを得ないやうになりつつある[4]」ことに気づく。そうした歴史的段階において自分が「国の為に」なすべきことは日本を西欧なみの立憲民主国たらしめることであり，そのためには，自分は在野の洋学者として留まって，「民衆を教育することを試み」かつ「彼らの輿論に訴える機関を見付けることが必要である[5]」と確信したのである。彼はめずらしいほど節操の堅固な自由民権主義者であった。

帰国後，彼は「共存同衆」の幹部となり，「国友会」を創設し，さらに「自由党」が結成されると，その副議長に選ばれて活躍する。しかしその後まもなく，党の事情も省みずに政府から金をもらって外遊した板垣退助に絶望して，大石正巳，末広重恭とともに自由党を去り，「独立党」を作った。明治18年（1885）11月，アメリカに渡る計画を立てていた馬場は，大石とともに，ダイナマイトを購入しようとした嫌疑で逮捕され，約6ケ月の拘留生活を送る。翌年6月2日，証拠不十分で無罪放免になると，あわただしく渡航準備をして，6月12日に横浜を離れたのである。

その後の辰猪の足跡を，彼の日記によって辿ってみると，おおよそ次のようになる。サンフランシスコ到着が6月27日。その後5ケ月ほどオークランドに滞在して，ここでのちに各地で行なう講演の原稿である「日本古代の武器と甲冑」(The Weapons and Armor of Ancient Japan) を書き始めた。彼の亡命の目的は，アメリカにおいて講演家としての地位を確立し，その上で，日本の政情をアメリカ国民に訴えることであった[6]。彼は最初の講演を同年11月5日にオークランドで行なったが，聴衆が集まらず，全くの失敗であった。彼は西部に見切りをつけて，11月14日に東部に向かった。翌明治20年（1887）2月24日にはニューヨークの American Institute で講演を行なったが，これは大成功で，250名の聴衆が集まったという。3月には終焉の地となったフィラデルフィアに移り，Franklin Institute（3月18日），Antiquarian Society（4月7日），ペンシルヴ

ァニア大学(4月14日)などで講演した。日記によれば，これらはいずれも成功したという。以後，彼はフィラデルフィアを基地にして，ワシントンやボストンにも足をのばして講演したり，英文で日本の政治の現状を訴える論文を書いてさまざまな新聞に投稿したりしていたが，1888年3月頃から病状が悪化し，11月1日ペンシルヴァニア大学病院で客死した。享年38才であった。

彼の日記は英文で書かれているが，実弟馬場孤蝶によって和訳され，『明治文化全集・第14巻　自由民権篇(続)』に収められた。病気があらたまったと思われる1888年8月13日から10月14日までは全くの空白であり，再びつけ始めた10月15日以後のものは病床日記である。彼の日記は，日記といっても毎日記入されているわけではなく，しかも，おおむね一・二行程度の簡単な記述で，買物の内容，発信・受信，出会った人物の名前等のメモの類である。だから，出てくる人名にしても，それがどんな人物であり，自分とどのような交渉があったのか等はほとんど書かれていない。彼の日記が，日々の生活の克明な記録や出会った人物の詳細な性格描写などからなっていれば，後世の研究家がどれほどか裨益されたことであろうと惜しまれる。

2

一方，その頃のホイットマンはどのような状態であったのであろうか。ワシントンの官庁（最初 Department of Interior，のちに Attorney General's Office)に勤務していたホイットマンが最初のparalytic strokeで倒れて，ニュージャージィ州のキャムデンに住む弟ジョージの家に同居するようになったのは1873年であるが，その後彼はかなり健康を回復し，電車やフェリーを利用して頻ぱんにデラウェア河向うのフィラデルフィアに散歩や気晴らしに行けるようになった。1884年，弟がキャムデンから12マイルほど離れたバーリントンに家を建てて移ることになり，ホイットマンにも一緒に来るように勧めたが，彼はフィラデルフィアを離れるのを嫌ってそれを断わり，ミックル街に家を買い，ひとりそこに移り住んだ。ホイットマンの脚の衰えを見かねた友人の Donaldson が，35人の有名人や

ホイットマンの友人にはたらきかけて寄付を募り，ホイットマンに一頭立て馬車（a horse and buggy）を贈ったのは，この年の9月のことであった[7]。

馬場辰猪がフィラデルフィアにやって来た1887年3月頃は，ホイットマンはまだ元気にこの馬車を乗り回していた。4月にはニューヨークまで出掛けて，恒例のリンカーン記念講演さえ行なっている。この年はまた，ホイットマンに終始献心的な愛情を示したギルクリスト夫人（Mrs. Gilchrist）の息子である画家ハーバート（Herbert）と19世紀アメリカを代表する画家イーキンズ（Thomas Eakins）が彼の肖像を描き，彫刻家モース（Morse）が彼をモデルに制作に励んでいた年でもあった。

翌1888年，彼は誕生日（5月31日）の2・3日後，馬車でデラウエア河畔まで行き，帰宅後，再度の発作に襲われた。主治医や友人のバック博士はホイットマンが数日ももたないだろうと判断したが，彼は奇跡的に回復していった。ただし，馬車でミックル街の外に出ることはもはやできなくなった。この第2回目の発作は，馬場の病気が悪化して社会的活動が困難になったのとほぼ時を同じくしている。

後年しばしばボズウエルの *Life of Samuel Johnson* に擬せられる *With Walt Whitman in Camden* を書いたホレス・トラウベル（Horace Traubel）がほとんど毎日ホイットマンのもとを訪れるようになったのは，この発作の数ケ月前からであった。そして3月からは，この老詩人との会話を克明にメモし続けていた。特にホイットマンが倒れてからは，彼のために使い走りや雑事をすすんでやったので，この若者（当時29才）は医師や看護婦に劣らず病人にとって欠かせない存在になっていた。これ以後のホイットマンにとって，フィラデルフィアの出来事の情報源は，主としてこの将来のボズウエルだったのである。

このように対比してみると，馬場がフィラデルフィアで活躍した1887年3月から翌年4月くらいまでは，ホイットマンもまだ馬車を乗り回し，ときにフェリーでフィラデルフィアにも出掛けた時期であり，2人が出会う可能性は決して皆無ではなかった。しかし，どうみても，2人は実際には出会っていないようである。もし会っていれば，馬場の日記にこの著名な

詩人の名前くらいは出てくるであろうし，またホイットマンの方も，日本に対してあれほどまでに強い関心を抱いていたのだから，どこかに馬場のことを書きとめているであろう。

3

馬場は何回かの講演を通じて多くの知人や友人をつくったようであるが，彼が積極的に参加したことがはっきりしている学会が一つある。彼の日記には，1888年4月30日(月)に「東洋学者，東洋クラブ (Oriental Club)を創立すべくフィラデルフィアに会す」とあり，さらに5月14日(月)に「東洋会の会合」の記述がある[9]。一方，この The Oriental Club of Philadelphia が1918年に出版した "Thirty Years of Oriental Studies" という84ページの小冊子をみると，その冒頭に会の設立の経緯が述べられてあって，Trumbull 氏ら数人の発起人が，地方的な Oriental Club をつくろうと，フィラデルフィアおよびその近郊に在住の幾人かの学者に呼びかけたところ，4月30日の会合に20人の学者が参加した，とあって，馬場の日記と一致する。そして署名者の中に "Baba" も含まれている[10]。馬場はそれまでの講演によって，すでに「東洋学者」の一人とみなされ，この学会の創立メンバーに加わっていたのである。

しかし，この冊子のどこにも，その後馬場が何かの発表や積極的な活動をしたとは書かれていない。ただ membership (会員)の頃で，former members の最初に "Tatsui Baba; * 1888" と記されているだけである。*印は物故年を示すとある。彼の日記にも，その後は Oriental Club の会合に出席したという記述は見当らず，各地に転地療養をしたことを思わせる記述がふえ，空白の日が多くなる。つまり，5月以降彼の肺結核は急速に悪化の一途を辿り，死までの半年間，彼には執筆以外の社会的活動をする力がほとんど残っていなかったのであろう。それに，少数の専門的な学者の集まりとしてのこの学会の性格を考えると，ここで彼がホイットマンや彼の友人と知り合った可能性はあまりないと言ってよいであろう。

さて，問題はコンロイ教授が示唆した Ethical Society である。日本では Ethical Religion ないしその実践団体である Ethical Society と

いうのはあまり知られていないので，少し紹介しておこう。これは，アメリカ人の生活の中では，結婚，葬式，等々において，他の宗教団体とほとんど同じ社会的機能を果すものであるが，両者間の相違は，Ethical Society の場合，会員を結びつける精神的基盤が，神学的な教義ではなく，倫理的な関心にあるという点である。人間関係の中で倫理的な価値を求め，磨いていくことによって，個人と社会をともに向上させることができる，というのがこの会の会員たちの基本的な信念なのである。会の案内冊子は次のように述べている。

> They〔the members of the Society〕believe man makes his own values, must stand on his own feet, and forthrighthy reject such crutches as are afforded by supernaturalism, miracles, and authoritarian revelation. Only then will man realize the full potential within him for creating the good life on earth[11].

Ethical Religion とは，いわば，伝統的な福音主義のキリスト教を全面否定する humanism（人文主義）なのである。

最初の Ethical Society はコロンビア大学の卒業生で，イエール大学で東洋文学と政治・社会倫理を教えていたアドラー（Dr. Felix Adler）によってニューヨークで創立された。現在全米に30の Ethical Societies があり，その連合体として American Ethical Union（AEU）がニューヨークにおかれている。

さて，私が Philadelphia Ethical Society とＡＥＵに問い合わした結果は，すでに「はしがき」で述べた通り，ホイットマンと馬場辰猪が同会の会員であったかどうかはわからない」というものであったし，馬場の日記にも，この会の名前は一度も出てこない。しかし，Ethical Society の案内パンフレットを馬場の日記と比較しているうちに，大きな手掛りを摑むことができた。それは，同会の創立の経緯を述べた部分に，馬場の日記に出てくる名前がふたつ見つかったことである。

> On Easter Sunday in 1885, S. Burns Weston, a former Unitarian minister from New England, began a course of six lec-

tures entitled "The Need for an Ethical Religion" at the City Institute, then on the northeast corner of 18th & Chestnut Streets. The last two lectures were delivered by Dr. Felix Adler, founder of the Ethical Culture Movement, and Dr. William Salter, founder of the Chicago Ethical Society. On June 1, 1885, twenty-four persons met and organized the Society for Ethical Culture of Philadelphia.[12]

Society for Ethical Culture というのは Ethical Society の旧名である。これをみると，Weston 氏というのが Philadelphia Ethical Society の初代会長となった人で，William Salter 氏がChicago Ethical Society の会長であるが，馬場の日記にもこの Weston とSalter というふたつの名前が現われるのである。特にウエストン氏とは親交があったらしく，彼の名は数回出てくる。最初は，馬場がフィラデルフィアに着いて間もない1887年3月7日で，「ウエストン氏に会う」という短い記述がある。次いで同年3月29日「ウエストン氏当地にあり，アート・クラブに余を訪う」とある。さらに10月9日には「ウエストン氏（他6名―略―）に手紙を書く」，12月11日「ウエストン氏等に会う」の記述がみられる[13]。馬場の簡略な日記の中に一つの名前がこれだけ繰り返し出てくるのはめずらしいが，前にも触れた通り，馬場自身は何の説明も加えていないので，彼の日記からだけでは，このウエストン氏なる人物は何物なのか，また彼とそのウエストン氏との関係がいかなるものであったかは，一向に判然としない。しかし安永梧郎の『馬場辰猪』伝中の「付録――逸話雑談」の「其八」は，それらの疑問を一挙に氷解してくれる。

二十一年十一月十一日なりけるとか，米国費府（そさいてー・ふぉーる・えしかる・かるちゆーあ）なる進徳学会にては，馬場の為に紀念祭を執行せりといふ，同会は君が生前加盟したるものにして曽て同会堂に於て日本監獄論を演説せしこともあり，会長ウエストン氏とは交誼殊に厚く断金莫逆の交りさへありたる程なれば，ウエストン氏が不幸を悲むこと又格別にして，当日氏の紀念演説は悲愴の情自ら言外に溢れ，百余の会員をして泣涕に沈み，殆ど席に堪へざらしめたり

と云ふ[14]。

「費府」はフィラデルフィアのことであり，進徳学会のルビにある「そさいてー・ふおーる・えしかる・かるちゅーあ」は Society for Ethical Culture で，すでに言及した通り，Ethical Society のことである。これによれば，馬場の日記に出てくるウエストン氏は間違いなく Philadelphia Ethical Society の初代会長のウエストン氏であり，日記には記されていないが，馬場はやはり同会の会員となって，講演すら行なっていたのである。(従って，日記中の「サルター氏」というのも，Chicago Ethical Society の会長の Salter 氏であったとみてよいであろう。)「断金莫逆の交りさへあった」という大時代的な表現にはやや誇張があるにしても，ウエストン氏が馬場の死後一周年に「紀念祭」を催し，心から彼を悼む演説をしたということは，彼の馬場に対する親愛の情が並々ならぬものであったことを示すものである。この本の著者である安永梧郎という人自身，明治28年から30年にかけて慶応義塾に学び，馬場辰猪を敬慕することのあつかった人であり，しかもこの本は馬場の死後10年目に出版されたものであるから，その内容は信頼できると考えてよいであろう。

さて，馬場が実際に Ethical Society の会員であったことは判明したが，では，ホイットマンの方はどうだったのであろうか。実は，この疑問への手掛りも，同会のパンフレットの中に見い出されるのである。というのも，このパンフレットは，24人の創立者の中にのちの *With Walt Whitman in Camden* の著者 Horace Traubel の名前をはっきりと挙げ，しかもその後に「(Whitman's Biographer)」と括弧つきの説明を加えているからである。さらに，同会のその後の会員の中に，宗教心理学の開拓者 James Leuba 教授や心理学者 William James 教授などの有名人がいたことが言及されているが，ホイットマンの名前は挙げられていない。ということは，逆に言えば，ホイットマンはこの会に加わっていなかったということである。もしホイットマンのような big name が会員中にあったとすれば，わざわざトラウベルの名前のあとに"Walt Whitman's Biographer" という説明を加えながら，当人の名前を洩らすはずがない

からである。ホイットマンは明らかに Ethical Society に入っていなかった。しかし彼の愛弟子トラウベルがその有力な会員の一人だったのである。

こうして断片的な資料をつなぎ合わせてみると，馬場とホイットマンのつながりが，コンロイ教授の言われたような直接的な親交ではなく，トラウベルを介した間接的なものであったことはほぼ間違いないであろう。馬場は，多分講演が縁で，ウエストン氏と親交を結び，Philadelphia Ethical Society の会員となるとともに，そこで創立委員の一人であるトラウベルとも知り合い，そのトラウベルが馬場のことをホイットマンに教えたのである。

4

さて，もつれた糸をここまで解きほぐしてきて，トラウベルが仲介者だったとすれば，*With Walt Whitman in Camden* の中に何か言及があるかもしれないと思い，同書を調べてみた。すると，案の定，馬場に触れた部分が3ケ所見つかったのである。その第一は1888年9月8日土曜日で，次のように記されている。

> I talked to W. of my Japanese friend Tatui Baba. Baba says his first strong impression received in America is of the fearful gap between its rich and poor. "Ah!" exclaimed W.: "Did he say that? Then I am convinced that he put his finger on the sore spot at once. I always come back to the same idea myself: there is the itch——the trouble: there is no trouble: the fact of the matter is the situation is growing worse and worse……"[15]

トラウベルから，馬場がアメリカで受けた最初の強い印象は貧富の差がはなはだしいことだと言ったことを聞くと，ホイットマンは「彼はそんなことを言ったのか。じゃあ，彼は即座に我々の痛いところを突いたわけだ。」と言って，馬場に賛同の意を表わしている。馬場にとって，アメリカはすでに成人した民主主義国であり，日本の将来の政治のモデルであった。それだけに，彼がアメリカで目にした現実は意外だったにちがいない。

馬場への第二の言及は1888年11月22日（木）で，これはきわめて短い。

> Took him Tatui Baba's pamphlet on Japan, "Yes, I want it," he said: "I never like anything Oriental to get away from me." [16]

トラウベルは馬場の書いたパンフレットをホイットマンにもっていってやったのである。そのときの「私は，東洋に関するものは何でも見ておきたいのだ」というホイットマンのことばは，彼が東洋に対していかに強い関心をもっていたかをよく示している。そしてこの関心は，このとき始まったものではないのである。

1860年（万延元年），新見豊前守を正使とする日本最初の遣米使節団がワシントンに渡り，時の大統領ブキャナンに謁見し，日本からの国書を奉呈したあと，6月16日ニューヨークに赴いたが，そのときマンハッタンの街路を立錐の余地もないほどに埋め尽した歓迎の群集の中に，詩人ホイットマンも混っていたのである。彼は早速 "Broadway Pageant" という長詩を物して Now York Times に載せ，同じ母胎から生まれながら長い間別れ別れになっていた兄弟が，距離と時間の桎梏をかなぐり捨てて初めて邂逅した光景と，それを眺めたときの深い感動とを歌ったのであった。だから，このときトラウベルから借りた馬場のパンフレットへの関心と期待もずいぶん大きかったであろう。

次にトラウベルがホイットマンを訪ねたのは，3日後の11月25日（日）であった。

> Returned me Baba's pamphlet, *The Political Condition of Japan*, remarking: "I read it through—— every word of it: there are curious institutions over there which we all ought to know about" —— things, as he thought, "we can only come to know from such native sources." Commended Baba's English as "more than good." Then asked me about Baba: listened attentively and questioned me. Baba is out at the University. [17]

ホイットマンはトラウベルから借りていた馬場の書いたパンフレットを返すのであるが，ここでわれわれは，それが『日本の政情』(The Political

Condition of Japan）であったことを知る。そしてそれを読んだあとのホイットマンの気持は複雑だったようである。というのも，このパンフレットは日本の政治の単なる紹介ではなかったからである。これは，"Showing the Despotism and Incompetency of the Cabinet and the Aims of the Popular Parties"（政府の圧制と無能を暴露し，あわせて，民権派の目的を示す）という副題が示すように，全篇が痛烈な藩閥政府批判と自由民権運動の擁護なのである。馬場はこの中で，自身の体験を引用しながら，「集会条令」が言論の自由を抑圧しているさまを如実に述べ，日本を真に名誉ある独立国にするために必要ないっさいの手段は，政府によって妨害され，圧迫されている，と訴えた。彼は表紙にローマ字で「頼むところは天下の輿論，目指すかたきは暴虐政府」と刷り込んでさえいた[18]。

こうした日本像は，ホイットマンにとって耳新しい，意外なものだったにちがいない。彼は東洋に対して，多分に美化されたイメージを抱いていたからである。「日本には，私たちみんなが当然知らなければならない，奇妙な制度があるんだね。そうした事柄は，その国の人を通じてしか本当のことを知ることができない」ということばは，ホイットマンがこのパンフレットによって，彼がそれまで抱いていた日本に関する先入観を壊された複雑な気持と，彼が"native source"たる馬場に寄せた並々ならぬ関心とをうかがわせるものであろう。しかし，彼はついに馬場に会うことはなかったのである。

ただ，トラウベルのこれらの文章には，ひとつ不可解なことがある。彼は馬場のことを"my Japanese friend Tatui Baba"と書いているが，彼が馬場の最近の消息をまるきり知らないようにみえることである。彼が初めてホイットマンに馬場のことを話した1888年9月8日には，馬場はまだ生きていたが，彼の体は肺結核の悪化ですでにひどく衰弱していたと思われる。日記が8月13日以後空白になっており，多分，9月末には入院したと考えられているからである[19]。しかも，11月1日に死んでいるから，トラウベルがホイットマンに馬場の書いた『日本の政情』を貸した11月22日には，馬場はもうこの世にいなかった。彼は11月25日においてもなお「馬場は今ペンシルヴァニア大学にいる」と書いて，馬場の死はおろか，

彼の病気にも全く触れていないのは奇異としか言いようがない。馬場の病状は，この年の4月にはすでにかなり悪化し，病原菌に声帯を冒されていたらしく，演説もできない状態だったというから[20]，5・6月頃に彼に会っていても，当然彼の健康の異常に気づいていたはずである。

では，トラウベルは馬場の死ぬ前の数ケ月のあいだ彼に会っていなかったと断定できるかというと，そこにも一つの疑問が残る。というのは，彼がホイットマンに貸した『日本の政情』というパンフレットは，1887年の初頭に書き始められ，同年暮れまでには脱稿していたが，印刷の出来上ったのは翌1888年の10月，つまり，馬場の死の直前だったと言われているからである[21]。そうだとすると，このパンフレットを持っていたトラウベルは，当然入院中の馬場に会っていたと考えられるであろう。彼の記述中に馬場の病気のことが全く出てこず，また，馬場の死をこれほど遅くまで知らずにいたのはどうしたことであろうか。それとも彼はこのパンフレットを，直接馬場からもらったのではなく，ウエストン氏や，誰か馬場を病院に見舞った友人からもらったのであろうか。しかし，その場合でも，馬場の病気について聞き知っているであろう。いずれにしても，これは今のところ解けない謎である。

こうしてみると，馬場をホイットマンに結びつけた道筋は一応明らかになったであろう。〈ニューヨークないしフィラデルフィアにおける馬場の講演→ウエストン氏→ Ethical Society →トラウベル→ホイットマン〉という順序である。決定的な仲介者の役割を果したのはトラウベルであった。ただ，二人が正確にいつ，どこで，どのようなかたちで出会い，どのような交友関係をもったかは，当事者が二人とも具体的に書き残していないので詳かではない。

惜しまれるのは，ホイットマンが馬場のことを聞いたのが，馬場の死の直前だったことである。馬場の日記に初めて「ウエストン氏と会う」という記入が見られるのが1887年3月7日であることから推測すれば，トラウベルが馬場と知り合ったのもかなり早い時期だったと思われる。もしも彼がもっと早く元気な馬場をホイットマンに紹介していたら，ホイットマン

と日本のつながりも，さらに興味深いものになっていたかもしれない。

注

(1) 英文学者・随筆家として著名な馬場孤蝶（1869—1940）は辰猪の実弟であるが，彼より19才年下で，この頃はまだ生まれていなかった。

(2) 彼はここでもたちまち頭角をあらわし，清廉な人柄によって福沢諭吉に愛されたらしい。諭吉は，後年，辰猪がアメリカに渡った際にも，彼の健康を気づかう手紙を書いており，また，辰猪の八周忌に当っては，切々たる「追弔詞」を寄せて，その中で，次のようにことばを尽して辰猪の高潔な人格を賛美している。「今を去ること凡そ三十年，馬場辰猪君が土佐より出て我慶応義塾に入学せしときは，年17才眉目秀英紅顔の美少年なりしが，此少年唯顔色の美なるに非ず，その天賦の気品如何にも高潔にして心身洗ふが如く，一点の曇りを留めず，加ふるに文思の緻密なるものありて同窓の先輩に親愛敬重せられ（中略）君は天下の人材にして其期する所も亦大なりと雖も，吾々が特に君に重きを置て忘るること能はざる所のものは其気風品格の高尚なるにあり，(中略)君の形体は既に逝くと雖も，生前の気品は知人の忘れんとして忘るる能はざる所にして，有年の後尚ほ他の亀鑑たり。」安永梧郎『馬場辰猪』（東京堂，明治30年）pp. 235—236.

(3) 馬場辰猪「自叙伝」（明治文化研究会編『明治文化全集・第14巻・自由民権篇(続)』昭和31年）p. 317.

(4) Ibid., p. 343.

(5) Ibid., p. 343.

(6) 馬場孤蝶訳「馬場辰猪日記（抄）」（『明治文化全集・第14巻』所収）p. 377.

(7) G. W. Allen, *The Solitary Singer* (Now York: Grove Press Inc., 1955), pp. 522—523.

(8) Ibid., p. 528.

(9) 『明治文化全集・第14巻』p. 389.

(10) Op. cit., p.5.

(11) The pamphlet issued by the Philadelphia Ethical Society, p.1.

(12) Ibid., p.5.

(13) Salter 氏に関しては，1888年5月13日に「サルター氏」とあるだけである。(Op. cit., p.389.)

(14) Op. cit., pp.249—520.

(15) Horace Traubel, *With Walt Whitman in Camden*, Vol. Ⅱ (New York: D. Appleton and Company, 1908), p.282.

(16) Horace Traubel, *With Walt Whitman in Camden*, Vol. Ⅲ (Now York:

Mitchel Kennerly, 1914), p.155.

(17) Ibid., p. 174.

(18) 萩原延寿『馬場辰猪』, 中央公論社，昭和52年；初版 昭和42年） p.272.

(19) Ibid., p.278.

(20) Ibid., p.275.

(21) この点では萩原と安永の2つの『馬場辰猪』伝はほぼ一致している。cf. 萩原, p. 272, 安永，p. 208.

Walt Whitman and Tatsui Baba

Taruyasu Tamura

SUMMARY.—After the setback of the Civil Rights Movement, Tatsui Baba went over to the U.S. in 1885. In the U.S. he was mostly engaged in lecturing, first in California and later in New York and Philadelphia. Meanwhile he met and made friends with S. Burns Weston, the first president of the Philadelphia Ethical Society. Baba became a member of the Society, probably at his suggestion, and gained an acquaintance with Horace Traubel, the author of *With Walt Whitman in Camden,* who was one of the founders and an active member of the Society. Before long Baba's consumption got aggravated and he died at the University of Pennsylvania Hospital on November 1, 1888.

Baba himself never met Whitman, but Traubel told Whitman about Baba and, finding him deeply interested in Baba, took one of Baba's pamphlets on Japan ("The Political Condition of Japan") to him a couple of months later. Whitman's impressions of the pamphlet seem to have been somewhat complex. He had been favorably inclined toward Japan and had a rather idealized image of her. Japan as he found in Baba's pamphlet, however, was quite different from what he had expected, for Baba's aim in this work was to show and bitterly criticize the despotism and incompetency of the Japanese Government. Whitman said to Traubel, "I read it through —— every word of it: there are curious institutions over there which we all ought to know about……(and) we can only come to know from such native sources." This remark shows both his surprise at what Baba had to say and his keen interest in Japan. Unfortunately, he was never to meet this valuable "native source," because Baba had already been dead more than twenty days when Whitman read this pamphlet.